#### 慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	明代福建の宗族と風水林 : 万木林説話をめぐって
Sub Title	Lineage organization and Fengshui forests in Ming period Fujian
Author	魏, 郁欣(Wei, Yu-hsin)
Publisher	三田史学会
Publication	2017
year	
Jtitle	史学 (The historical
	science). Vol.87, No.1/2 (2017. 7) ,p.67(67)- 86(86)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koaraid=AN00100104-20170700-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 明代福建の宗族と風水林

# 万木林説話をめぐって-

#### はじめに

は全国的にも群を抜いていた。 上がる地点)を取り囲む樹林は気を墳墓に導入する効果また、龍脈(気の流れる経路)上の樹林や穴(気が沸きまた、 わる人間の活動が慣習的に行われるようになった。それ 建では明代以降風水思想が流行し、風水林の育成にかか しばしば風水林と呼ばれている。とくに中国東南部の福 および風が気を吹き散らす事態を防ぐ効果があるとされ、 満ち溢れている土地は風水的に優れているとされている。 風水の観点からいえば、万物を生みだし働かせる気が

もあった。風水知識およびその実践が中国東南部におい てとりわけ普及したのは「この地域に顕著に発達の見ら また、福建は宗族組織の発達が見られる地域の一つで

#### 魏 郁 欣

習をめぐる人々の行動は実に多岐にわたることが明らか 樹木)との関連についてこれまで考察した結果、風水慣 保全のために風水林を設置することが共通の前提であっ 察するもの、の二系統がある。これらの研究には風水の(8) この風水観が生態環境の保全をいかに促進したのかを考 水林とが重なることもあったという。 た。ただ、筆者が福建宗族と墳樹(墳墓の周辺に生える 切口として中国人の風水観を解明するもの、ならびに② 極的な関与を行ってきたからである」とされるように、 たと考えられる。実際、族有林(一族共有の樹林)と風 宗族組織と風水慣習の両事象は密接不可分の関係にあっ れた父系の宗族が、自らの祖先の墓地の風水に対する積 風水林について言及したこれまでの研究は、①それを

明代福建の宗族と風水林

になった。筆者の見解が正しいとすれば、風水林をもっ

その多様性を見誤る恐れがある。 ぱら風水の保全にかかわるものとしてとらえるだけでは、

そこで本稿では風水慣習の一つとしてしばしば取り上

建甌 問うことにしたい。そしてその具体的な事例として福建 それに自ら関与したことにはどんな意味があったのかを げられてきた風水林に改めて着目し、明代福建の宗族が 護区を挙げる。元代に成立したとされる万木林は本来風 水上の理由に基づいて植えられた樹林ではなかった。と (当時は建寧府建安県) の万木林と呼ばれる自然保

において風水林として描かれるようになった。ここでは ころが十五世紀以降、万木林の創設者楊達卿の孫楊栄の 福建建甌の楊一族が共同で所有する万木林をとおして、 く定められた結果、 みだしたのかをめぐる説話 科挙合格を契機に万木林がいかにしてその科挙合格を生 し、それによって明代福建の宗族と風水林との関連を改 般樹林が風水林へと転換していった過程について考察 一般樹林であった万木林は物語言説 (万木林説話と呼ぶ) が数多

卷)』などの族譜関連資料、 八閩三楊匯譜 なお、本稿で主に用いる史料は『楊族之譜』一巻、 (楊栄世家卷)』、『中華楊氏通譜 および万木林説話の作成を (古代

一、風水林として描かれた万木林

主導した楊栄の別集『楊文敏公集』である。

#### 1 楊達卿の万木林設置

ある建甌・建陽・順昌の境界が接する場所に位置してい る武夷山の東南、 万木林は万木山ともいい、 すなわち現在福建省南平市の管轄 茶の産地としてよく知られ

る。二八三五畝の面積を有する万木林が中国最初の自然

七年のことであるが、万木林そのものの歴史は古く、(2) 保護区の一つとして認められるようになったのは一九五 「元代の楊達卿が資金を出し樹木を栽培した」ことを嚆

名は福興。内閣大学士として明朝五代宣徳帝に重用され 楊達卿(?~一三七八)は建安(現在の建甌市)の人。 矢とする。

行った人物として高く評価されている。この意味におい 同様であった」といわれるように、慈善事業を積極的に きない者をみな救済した。また、同郷の人々に対しても て、楊達卿の万木林設置は主に慈善事業の一環として位 た楊栄はその孫である。裕福な家庭に生まれた楊達卿は 「宗族の中の貧者や病者、 喪葬を行えず独身で婚嫁がで

置づけられる。すなわち万木林は「学校・祠廟・橋梁の

ったことから、楊達卿は死後に「少傅工部尚書兼謹身殿を主要目的とするものであった。また楊栄がその孫であ建設や貧民の保養・葬儀などのために用いられる」こと(5)

## 2 万木林説話について

大学士」が追贈された。

万木林成立後、元末に建寧路総管を務めた阮徳柔はそれを地域社会の発展に貢献するものとし、万木林の繁茂方木林を題材とした文章はいくつか伝わっている。現存するものとして、楊栄「万木図」を描いたという。結局のところ「万木図」は後世に残らなかったが、これ以外のところ「万木図」は後世に残らなかったが、これ以外のところ「万木図」は後世に残らなかったが、これ以外のところ「万木図」は後世に残らなかったが、これ以外のところ「万木図」は後世に残らなかったが、これ以外のところ「万木図」は後世に残らなかったが、これ以外のに、楊栄「万木図記」などが挙げられる。これらは便宜上の総称として万木林説話と呼ぶことにする。
「万木林説話のなかで、楊栄による「万木図事実記」は万木林説話のなかで、楊栄による「万木図事実記」は「万木林説話のなかで、楊栄による「万木図事実記」は「万木林説話のなかで、楊栄による「万木図事実記」は、「万木林説話のなかで、楊栄による「万木図事実記」は、「万木林説話のなかで、楊栄による「万木図事実記」は、「万木林説話のなかで、楊栄による「万木図事実記」は、「万木林説話のなかで、楊栄による「万木図事実記」は、「万木図書」という。

祖墳のあるところ、必ず子孫を分居させ、祭祀に供誠孝行の人であり、善行を楽しみ、道義を好んだ。その昔、亡くなった祖父達卿公は生まれついての至

青々と茂ったのに、どうして見にいかないのか」と 杖をついた老人が訪れてきて、「お前が植えた木が することをしなかった。栗がなくなると、門を閉じ ると貧民が続々とやってきた。公は彼らが来れば食 た者には報酬として粟一斗を与える」といった。す 樹する人足を募ることを口実に、「杉木一本を植え うとしたが、人々が勘ぐるのを心配し、大富山で植 人々は食べ物が乏しくなった。公は庫を開いて救お 庫は栗でいっぱいになった。大凶作の年、 を置き、借りたい者には随意貸しだした。数年後 りを蓄え、さらに機舂〔水力を利用した挽臼〕二機 になった。公は決まった量を祭祀に供するほか、残 力を怠らなかったため、収穫はほかの土地と比べ倍 肥沃な土地だった。毎年春耕のときになると、公は した。竜津大富山は先代の墳塋があり、公はその傍 いった。公は不思議な夢だと思ったが、その時は気 て昼寝した。夢に突然大富山から一人の白衣を着 べ物を与え、粟を給して立ち去らせ、その名を記録 族人を率いて自ら耕作して収穫に備えた。朝夕の努 に居を構えた。山は数十里にもつながり、ふもとは 地域 0

明代福建の宗族と風水林

に留めなかった。だが何年後、山木が繁茂し、

殖したとしても、たとえ雨と露の恵みによって潤し思い出し、「たとえ昼夜をとおして休むことなく繁に広がり整然と並ぶさまを目の前にして老人の夢を

うか、確かめたことはなかった。今こんなに茂ったのか、確かめたことはない。まさかの山の神靈からの助けなのったことはない。まさかの山の神靈からの助けなのったことはない。まさかの山の神靈からの助けなのったことができたとしても、こんなに短い期間で整養うことができたとしても、こんなに短い期間で整

は賢明な子孫ではない」と戒めた。いれば、彼らに与えよ。私のいうことに従わない者よ。貧しくて住まいがない者や死んで棺がない者が

い。橋梁、学校、寺院、

祠堂などの建設にだけ用い

に従い、この山の木は誓って他人に売ってはならなのは決して偶然ではない。お前たちは私のいうこと

て人々は「公〔楊達卿〕は人を活かす徳行があったがゆはまた盛んに生い茂るようになった。その繁茂ぶりを見とく伐採した。ところが、いったん消えてしまった林木とく伐採した。ところが、いったん消えてしまった林木とことばはは父の死後、寺院の改築に用いられる建材を民栄の伯父は父の死後、寺院の改築に用いられる建材を民栄の値文は、法武年間(一三六八~一三九八)、楊

遺沢によるものである」と非常に感心したという。栄はまさにその繁茂ぶりと似ている。それはすべて公のえに、その樹木は生気が満ち溢れている。公の子孫の繁

また、金幼孜「万木図記」にも似たような話の展開がまた、金幼孜「万木図記」にも似たような話の展開がまた、金幼孜「万木図記」にも似たような話の展開がまた、金幼孜「万木図記」にも似たような話の展開がまた、金幼孜「万木図記」にも似たような話の展開がまた、金幼孜「万木図記」にも似たような話の展開がまた、金幼孜「万木図記」にも似たような話の展開がまた、金幼孜「万木図記」にも似たような話の展開がまた、金幼孜「万木図記」にも似たような話の展開がまた、金幼孜「万木図記」にも似たような話の展開がまた。

ている。 といる。 でいる。 でいる。 でいる。 でいる。 との山木が青々と茂り、そこから彼のがあるがゆえに、その山木が青々と茂り、そこから彼のがあるがゆえに、その山木が青々と茂り、そこから彼のがあるがゆえに、その山木が青々と茂り、そこから彼のさらに胡広「万木山記」には「楊達卿は人に及ぼす徳

万木林は一般の樹林と比べ一層繁茂する風水林へと変貌降に著わされた万木林説話では、「楊達卿の徳行によりであった。すなわち万木林は風水の保全を目的とした風立させたのは学校・祠廟・橋梁の建設および救貧のため以上から明らかなように、楊達卿が元代に万木林を成以上から明らかなように、楊達卿が元代に万木林を成

であろうか。 られるようになる。では、その意図は一体どこにあるの った当時流行していた風水的な説明論理がしばしば用い そしてその効果として子孫繁栄が遂げられた」とい

## 二、楊栄と個々の風水説話

実記」であった。

楊栄と万木山説話

という。楊栄は以後、翰林院侍講、 好感を抱かせたため、文淵閣に入り、名を栄と改めた。 院編修に任命されたが、その後、丁寧な対応で永楽帝に 永楽十四年(一四一六)に翰林院学士(長官)に抜擢さ った。永楽五年(一四〇七)に右庶子(太子の世話係)、 従)に昇進した。永楽帝の北巡に従うこともしばしばあ 同時に入閣した七人のなかでは、楊栄が最年少であった 初名は子栄。建文二年(一四〇〇)の進士。最初は翰林 楊栄(一三七一~一四四〇)は建安の人、字は勉仁、 右諭徳(太子の侍

らである」と述べている。ここでいう徳積みとは、楊達に選ばれたのは「実にわが先祖が徳積みを重ねてきたか 永楽帝の知恩を受けて右庶子を兼ね、さらに翰林院学士

楊栄は「万木図事実記」

の最後において、

自分自身が

頼することができたのではなかろうか。

な官界生活を歩み始めたといった既成事実に対し、 すなわち右庶子と翰林院学士との両官職を兼任し、 卿が育林をとおして救済活動を行ったことを指している。 が自己解釈を試みた成果の一つはまさにこの「万木図事

栄との親交があった。かくして、楊栄は官界において何 楊栄と似たような経歴を持っている二人はそれゆえに楊 七)に永楽帝の北巡に付き添っていた胡広と金幼孜の二 前述の「万木山記」、「楊氏万木図序」、「万木図歌・為楊 なく侍講に昇進した。王孟端は同年に文淵閣に入った。 たものであると思われる。すなわち永楽五年(一四〇 庶子栄作」、「万木図記」はこうした背景のなかで誕生し 合いの何人かの有力政治家にも説話の作成を依頼した。 人かの政治家と親交関係を築いたため、 永楽元年(一四〇三)に翰林院編修を担当した後、 人はそれを契機として楊栄との交際を深めた。楊士奇は さらに自己解釈の信憑性を高めるために、 説話の作成を依 楊栄は知り

### 楊栄と白鶴山説話

2

ところで、「万木図事実記」 の作成よりやや早

卿の墓地が設置された白鶴山にかんする説話をすでに著 すなわち翰林院編修に任命されたとき、楊栄は祖父楊達 わしていた。その一部は以下のようである。

さらにその運搬費を出した。無涯は大いに悦び、そ 楊彦禎はすぐに兄弟を集め、竜津の木三万本を与え、 なかった。そこで郷紳の蘇明遠を誘い、二人で家を 決まらなかった。ちょうどそのとき、真如寺の僧侶 積み、孝行を尽くして亡くなったが、なかなか墓が たが、叶わなかった。祖父は存命中、徳行・善行を なさまはまるで鶴かのようである。……実に重みの ためだ。今この土地でもって礼にしたい」といった。 それはこの土地にふさわしい人が現れるのを待った で買おうとする人がいたが、私は同意しなかった。 ついに白鶴山の土地を献上し、「ここはかつて大金 訪ねてきて木材を分けてもらうように求めた。伯父 無涯が寺の改築工事を行おうとしたが、建材が足り ある吉地であり、大勢の人々がそこに埋葬地を求め に山がある。それは高々とそびえ、その勢いの盛ん 私の出身地建寧には府城から東へ二里離れたところ 祖父がまだ埋葬されていないことを知ると、

3

れたものである。 受けられた。これはすべて先祖の遺沢によって得ら に科挙に合格し、翰林院に職を得て、特別の恩遇を こに連れていってともに勉強したことがあった。後 った。……私が府学に通っていたとき、弟たちをそ

科挙合格およびそれに伴う出世について楊栄が自己解釈 を試みたものである。 いう吉地が与えられたといった風水的な説明論理を用い 行・善行を積むこと」(「種徳積善」)によって白鶴山と

この白鶴山説話は万木林説話と同じく、

楊達卿 の

祖」と崇められる楊宗興の埋葬地、 話がある。それは崇安県へ移住したことから「崇安開基 処」を題材としたものである。その一部は以下のようで 実は楊一族にはもう一つ古くから伝わってきた風水説 もう一つの風水説話:白狸眠処説話 すなわち「白狸眠

師がいた。彼は近づいてきて、「舟に乗せてもらえ 建甌県豊楽里で舟を停めると、川西にたまたま風水 ちは父の遺体を舟に載せ、 公〔楊宗興〕は八五歳の高齢で亡くなった。息子た 埋葬地を探そうと決めた。

ある。

そこで占って吉の結果が出ると、埋葬することにな

去った。引留めようとしたが、果たせなかった。兄 その川は崇安県より流れ、 乗せてもらった恩義に報いることにしよう」といい なったが、兄弟は嫌な顔一つをしなかった。風水師 た白狸は体を三回伸ばし三回跳び上がって立ち去っ とした風が体に当たり、激しく鳴る雷で驚いて起き に登った。五更〔午前四時~六時〕になると、寒々 弟はその言葉に従い、その日の夕方に棺を担いで山 れば、子孫は自然に繁栄する」といった後に、立ち 夜急いで白狸が眠る処を探してみよ。そこに埋葬す 台。今日はまさしく埋葬に良い日だ。お前たちは今 並み〕は筆置きの形をしている。前は文峯、後は三 して辛に向かっている。案山〔穴の前方に見える山 すぐに伸びたままで眠っている白狸がいる。乙に座 い気はまるで一本の筋が通っているかのようである。 ある山を指して「この山は武夷山から発し、清々し ていないとなれば、吉地を教え、それで三たび舟に の風水師がまたいた。このようなことが三たびにも るか」と尋ねたので、兄弟はみな許した。翌日、 「お礼はできないが、父君の遺骸がまだ埋葬され 形は雌雄を成している。竜会穴には、体がまっ 水流の音は雷のようであ そ

> 果たせず、「あの人はもしかして仙人か?」といい 立ち去った。兄弟は風水師を引留めようとしたが、 はない。敢えて報酬を望もうや」といい、 積みを重ねてきたからである。それは決して偶然で を得たのは、お前たちの先祖が何代にもわたって徳 を尋ねて謝礼をしようとしたら、風水師は「今吉地 を家に招き入れたいくらい感謝し、さらにその字名 を意味する」と祝賀の言葉を贈った。兄弟は風水師 伸ばし三回跳び上がったというのは、三代にわたっ として立ち去った」と答えた。風水師は「体を三回 に驚き、体を三回伸ばし三回跳び上がったら、 がいたか」と聞いた。兄弟は「本当にいた。雷の音 きて「体がまっすぐに伸びたままで眠っている白狸 十月二十一日のことであった。風水師がまた訪ねて た。兄弟は急いで父の遺骸を白狸眠処に埋葬し、舟 て朝廷の高官を輩出し、富貴を永遠に得られること で帰った。それは宋真宗大中祥符四年(一〇一一) 固辞して

って「白狸眠処」と呼ばれる最高の吉地が与えられたと慶・楊仲祥・楊季瑞が風水師に助け舟を出したことによこれはまた楊一族の善行、すなわち楊宗興の子楊孟

舟を返して家に戻った。(34)

なかった。する際、楊一族自身がこの説話を用いることはほとんどする際、楊一族自身がこの説話を用いることはほとんどるかもしれない。ただ、楊栄の科挙合格を合理的に説明いった話の展開からみれば、前述の二説話と若干似てい

名は白狸窩である。仙人が白狸の眠る処を指示したので、 この説話は楊栄の科挙合格というよりも、 おける「三代にわたって朝廷の高官を輩出した」といっ 富貴を永遠に得られることを意味する」とあるように、 がったというのは、三代にわたって朝廷の高官を輩出し、 の長男楊錤は刑部尚書にそれぞれ任命された。換言すれ は見つからないが、楊緘の長男楊臻は吏部員外郎、 進士となった。進士となったことについての詳細な記載 を務めた。楊季瑞の長男楊緯は宋紹興二十八年(一一五 た既成事実に対する楊一族の自己解釈である 八)に、次男楊緘は宋乾道六年(一一七〇)にそれぞれ 楊宗興の長男楊孟慶は永安県 ところが楊一族のみならず、他者による史料におい 「白狸眠処」について言及したものがいくつか見られ の主簿、 たとえば、一この土地は甌寧県の豊楽里にあり、 風水師の祝賀の言葉に「体を三回伸ばし三回跳び上 三男楊季瑞は剣州 (現在の三明市に位置す (現在の南平市) むしろ宋代に 0) 楊臻 刺史 って

中地元の人々はここを白狸窩と呼ぶ。……まさに富貴を今地元の人々はここを白狸窩と呼ぶ。……まさに富貴を生みだす最高の土地である」とあるように、楊宗興の埋生みだす最高の風水宝地として当時の風水書『地理人子須郷・によって大いに取り上げられていることが知られる。風水専門家による認可を得て自他ともに認める好風水になったがゆえに、「〔楊宗興が〕埋葬されて三〇〇年の後、なったがゆえに、「〔楊宗興が〕埋葬されて三〇〇年の後、なったがゆえに、「〔楊宗興が〕埋葬されている。本らに同時代の地方志にも次のような白狸眠処説話が収録されている。

楊万大は崇安の人、物静かな性格で、武夷山で住ま場方大は崇安の人、物静かな性格で、武夷山で住までいた。夜は灯をつけて独り坐し、琴を弾いたり詩を詠んだりすることを自らの楽しみとした。の冠をつけ黒い服を着た立派な顔立ちの道士が来た。武夷宮に行く途中であるが、夜の泊まり所が見つからないというので、門をたたいて楊万大の家に投宿らないというので、門をたたいて楊万大の家に投宿があるが、後の人、物静かな性格で、武夷山で住まするよう求めた。その後、道士はたびたび来たが、

ちに、他所に住む子孫たちがその土地の豊かさを聞 だ」といった。その日になると、楊万大は棺を山中 する川や美しい山を指し、「某年某月某日に両親の 向かった。豊楽里に着くと、道士は澄んだ水が蛇行 といった。そこで二人は舟に乗り、甌寧県豊楽里へ どういて一緒に行けよう」と答えた。道士は、「埋 士がまた来て「私はこの世の者ではない。今神仙 楊万大はそのつど彼を賓客として遇した。しばらく り両親の遺体をそこに埋葬した。一年も経たないう に運んだ。果たして白狸がいたので、いわれたとお こが墓所だ。白狸が起きれば、それが埋葬のとき 棺をここに運んできなさい。白狸眠処があれば、 葬が終わるのを待って、一緒に行っても遅くない」 ていぶかしく思い、しばらくすると憂鬱な様子で、 命じて楊万大を連れていこうとした。楊万大は初め なので、報いは子孫にあるだろう」といい、船頭に を見れば、天は必ずそれに報いる。ただ、お前は年 前に別れを告げにきた。お前の行いが非常に善いの 地に戻らなければならなくなったので、わざわざお するとその回数はますます多くなった。ある日、道 「両親は亡くなっているが、まだ埋葬していない。

は楊万大の子孫である。

る」とあるように、作者は特書すべき点としてわざと楊ただ文末に「現在の太師文敏公楊栄は楊万大の子孫であ族の繁栄について説明を行うために作られたものである。「楊墩」と改名された。この説話は甌寧県における楊一で教」と呼ばれていた土地はそれゆえに瑞)が崇安県から甌寧県へ移住した後に、一族が豊かに瑞)が崇安県から甌寧県へ移住した後に、一族が豊かに瑞)が崇安県から甌寧県へ移住した後に、一族が豊かに

後述のように、楊万大(すなわち楊宗興の三男楊季

が工部尚書となった」、②「現在の太師文敏公楊栄は楊①「〔楊宗興が〕埋葬された三○○年の後、文敏公楊栄や地方志に見る白狸眠処説話をとおし、地域の人々は、や地方志に見る白狸眠処説話と、宋代における科挙合格者や

栄と楊万大との関係性について触れている。

る。 由を楊宗興の埋葬地の風水効果に求めていることがわか 万大の子孫である」、とあるように、楊栄の成功する理

さらに「本族には墓地一箇所があり、甌寧県豊楽里のさらに「本族には墓地一箇所があり、甌寧県豊楽里のさらに「本族には墓地一箇所があり、甌寧県豊楽里のさらに「本族には墓地一箇所があり、甌寧県豊楽里のが、なぜ楊栄はあえて新たな風水説話(万木林説話、白鶴山説話)を作ることに力を入れたのか、といった疑問が浮上する。

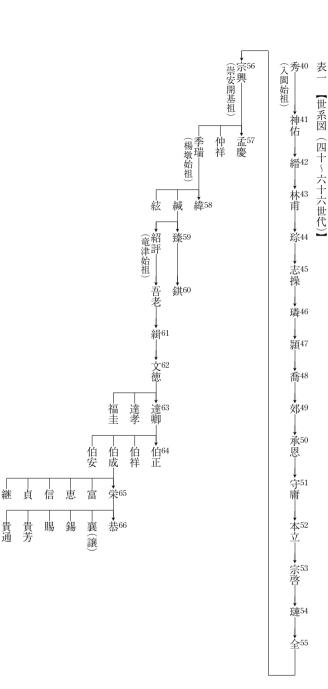
# 三、楊栄を取り巻く宗族の危機的状況

を試みたのかについて見る必要がある。な状況にあったのか、それに対して楊栄はいかなる対応なわち一四〇三年から一四一六年にかけて楊一族がどんかを考察するためには、まずこの両説話の成立年代、すかを考察するためには、まずこの両説話の成立年代、すなぜ風水説話を新たに作成しなければならなかったの

### 1 楊一族について

隋の煬帝(楊広)に殺害される危険を避け閩の呉興 (福建省浦城県)へ逃れてきたといわれる楊秀(楊堅の (四男)は「入閩始祖」になったが、それから十六世代後 四男)は「入閩始祖」になったが、それから十六世代後 四男)は「入閩始祖」になったが、それから十六世代後 四男)は「入閩始祖」になったが、それから十六世代後 四男)は「入閩始祖」になったが、それから十六世代後 四男)は「入閩始祖」になったが、それから十六世代後 四男とびまるが、次男楊仲祥は建陽県、三男楊季瑞は甌寧 にとどまるが、次男楊仲祥は建陽県、三男楊季瑞は甌寧 原へそれぞれ移住した。こうして楊一族は三つの系統 (崇安・建陽・甌寧)に分かれた。そのうちとくに、甌 寧派は「人が多く家が富む」ようになり、楊季瑞が最初 の八郎 (2)

楊宗興の功績や善行を顕彰するための牌坊建設を申請す楊宗興の功績や善行を顕彰するための牌坊建設を申請すに刑部尚書になった楊錤は退官後に故郷に隠居し、そのに刑部尚書になった楊錤は退官後に故郷に隠居し、その際には、陳源中横嶺頭にある複数の土地を購入し、そこ際には、陳源中横嶺頭にある複数の土地を購入し、そこに一、東京市を建て、墓地を管理する住み込み専従祠僧を雇った。さらに楊鍼の長男楊臻、次男楊緘、さらに前述のように、楊季瑞の長男楊緯、次男楊緘、さらに



明代福建の宗族と風水林

\*本表は主に『中華楊氏通譜(古代巻)』一七四~一七九頁に基づいて作成したものである。

七七 (七七)

峚人

進士

举人

举人

表二 【明代における建安竜津派の科挙合格者】 第六五代 洪武三十年(一三九七) 楊栄 建文二年(一四〇〇) 第六七代 天順三年(一四五九) 楊仕偉

成化十一年(一四七五) 進士 景泰四年(一四五三) 举人 楊仕倧 天順元年(一四五七) 進十: 楊仕儆 天順三年(一四五九) 挙人

弘治八年(一四九五)

第六八代

楊易 正徳三年(一五〇八) 進士 成化十九年(一四八三) 举人 楊旦 弘治三年(一四九〇) 進十: 楊昉 举人 弘治十一年(一四九八) 楊亘(初名楊晃) 成化十三年(一四七七) 举人

第六九代

楊崇 弘治十一年(一四九八) 挙人 楊邁 弘治十四年(一五〇一) 挙人 楊京 正徳十四年(一五一九) 举人 第七十代 嘉靖十九年(一五四〇) 挙人 楊肇

第七一代

挙人 楊棐 嘉靖三十二年(一五五三) 進士 ? 举人 楊成名 嘉靖四十一年(一五六二) 准十

\*本表は嘉靖『建寧府志』巻一五、選挙、民国『建甌県志』巻一〇、 選挙、および『八閩三楊匯譜(楊栄世家巻)』二、光輝世家、 (四) 仕宦、に基づいて作成したものである。

することを可能にした。(43) 立場に置かれることになっ る な矛盾が激化したため 結集力を向上させ、 った必然的な結果として、 かしなが 楊 族 5 は 墳墓におけ 楊錤  $\equiv$ が宗 か、 0 族形 楊錤 分派を一 る遠祖祭祀をとお ほ の叔父楊詔評は 宗族内部に か 成 0 運 分派は相 つの宗族組織に 動 0 なか お け 対的に で主 て る社会的 違 族 弱 統 権 13 合 0

人

と移って新たな分派を形 者や任官経験者を輩出 0 宗族内部においてずっと弱い立場にいた建安竜津派 この建安竜津派に属 0) お 楊吾老とともに甌寧県を去り、 科挙合格を契機として何世代にもわたって科挙合格 よそ七〇年後、 心してい すなわち したため 成した。 る。<br/>(4) 兀 表 隣 楊吾老の曾孫楊  $\bigcirc$  $\bigcirc$ 接する建安県竜 年に 一参照)、 楊 達 これ 휃

0)

孫

ま は

達卿

転して繁栄期を迎えた。

## 2 楊栄の試み:宗族統合

代わって宗族組織の運営維持に全力をあげた。と、今度は楊栄を中心とした建安竜津派がそれに取って取り組む動向が宋元期において見られたが、明代に入る取り組を中心とした甌寧派は宗族組織の形成に積極的に

たとえば永楽六年(一四〇八)、楊栄は族人の相互扶たとえば永楽六年(一四〇八)、楊栄は族人の相互扶たとえば永楽六年(一四〇八)、楊栄は族人の相互扶たとえば永楽六年(一四三九)、膨大な費用をかけて「崇安開基正統四年(一四三九)、膨大な費用をかけて「崇安開基正統四年(一四三九)、膨大な費用をかけて「崇安開基は」とされる楊宗興の墓地を改修した。なお楊栄のみならず、建安竜津派に属するほかの族人にも宗族組織の運らず、建安竜津派に属するほかの族人にも宗族組織の運営維持に取り組む傾向があった。たとえば楊栄の次男楊賞維持に取り組む傾向があった。たとえば楊栄の次男楊賞維持に取り組む傾向があった。たとえば楊栄の次男楊賞維持に取り組む傾向があった。たとえば楊栄の次男楊賞は宗族中の生活困難者の婚嫁・喪葬に用いる田産を自ら購入した。

文において、「一族を挙げて福建に入ったが、建陽に住ら当該分派の支譜の序文執筆依頼を受けた楊栄は、その正統五年(一四四〇)、崇安派に属する族人楊季昶か

明代福建の宗族と風水林

寧)楊族」の結集力の向上にあったものと思われる。住む者が現れた。盛んだった楊氏はついにこんなになったしまった」と嘆いている。したがって宗族組織の維持・強化に積極的に関与した楊栄の最大目的は仕官や商持・強化に積極的に関与した楊栄の最大目的は仕官や商場のために全国各地に散在する、海域崇安に住む者、浙江の竜泉にむ者、建安に住む者、浦城崇安に住む者、浙江の竜泉に

話であったと推測する。 以上のように十五世紀以降、科挙合格や任官などを契以上のように十五世紀以降、科挙合格や任官などを契めた。それかするか説得力を欠いた。 とするならば、優越的地位に立つ正当性について合理理が風水説話だった。既存の白狸眠処説話は楊宗興の埋理が風水説話だった。既存の白狸眠処説話は楊宗興の埋理が風水説話だった。既存の白狸眠処説話は楊宗興の埋理が風水説話だった。既存の白狸眠処説話は楊宗興の埋けが栄える理由を説明するにはいささか説得力を欠いた。 それゆえ、それと性質を異にする別の風水説話を作成する必要が生じた。それがすなわち万木山説話と白鶴山説話であったと推測する。

## 3 なぜ風水説なのか

万木林説話と白鶴山説話は楊栄の科挙合格やその後の

便利であった。それが風水思想である。当該地域で幅広く共有されている説明論理を用いるのがたものである。相手にわかりやすく理解させるためには、出世、建安竜津派の繁栄の理由を説明するために作られ

明代福建の風水書『地理独啓玄関』には、徳を積んだ 、語とした気)に恵まれているからである。 は、徳を積んだ 明代福建の風水書『地理独啓玄関』には、徳を積んだ 明代福建の風水書『地理独啓玄関』には、徳を積んだ まうに、吉地とは具体的には、草木の繁茂しているよう ように、吉地とは具体的には、草木の繁茂しているよう ように、吉地とは具体的には、草木の繁茂しているよう な自然が豊かな土地を指す。それはつまり生気(生き生 な自然が豊かな土地を指す。それはつまり生気(生き生 をした気)に恵まれているからである。

置があったことからみれば、草木の繁茂に対応する人間言があったことからみれば、草木の繁茂に対応する人間の言説は明代の福建地域にある程度馴染みのあるものでの言説は明代の福建地域にある程度馴染みのあるものでの言説は明代の福建地域にある程度馴染みのあるものでの言説は明代の福建地域にある程度馴染みのあるものでの言説は明代の福建地域にある程度馴染みのあるものでの言説は明代の福建地域にある程度馴染みのあるものでの言説は明代の福建地域にある程度馴染みのあるものでの言説は明代の福建地域にある程度馴染みのあるものでの言説は明代の福建地域にある程度馴染みのあるものでの言説は明代の福建地域にある程度別楽みの数でに対応する人間でいるように表す。

界の繁栄をも信じていたといえよう。

うとしたのであると考えられる。木林を、一般の樹林から風水林へと人為的に転換させよ語言説の側面において祖父楊達卿によって設置された万語言説の側面において祖父楊達卿によって設置された万語言説の側がは、楊栄は明代福建の風水書によく見られ以上のように、楊栄は明代福建の風水書によく見られ

おわりに

った。 場一族は人口増や移住地の開発に伴い宋代以降においった。

再認識させる必要があると考えた。 再認識させる必要があると考えた。 再認識させる必要があると考えた。 再認識させる必要があると考えた。 再認識させる必要があると考えた。

楊栄はすでにある事実(科挙に合格し官途も順調)

に

た吉地であった。

大吉地であった。

大吉地であった。

大吉地であった。

大吉地であった。

大吉地であった。

大本から自ら作成した風水説話のなかで祖父の徳行を唱え、なわち自ら作成した風水説話のなかで祖父の徳行を唱え、なわち自ら作成した風水説話のなかで祖父の徳行を唱え、当時の福建地域で流行していた風水思想を活用した。すがし自己解釈をつうじてさらに権威づけする論理として、対し自己解釈をつうじてさらに権威づけする論理として、

以上のような万木林説話の制定過程についての考察を以上のような万木林説話の制定過程についての考察を以上のような方本林説話の制定過程についての考察を以上のような万木林説話の制定過程についての考察を以上のような万木林説話の制定過程についての考察を以上のような万木林説話の制定過程についての考察を以上のような万木林説話の制定過程についての考察をのがあったといえるのではないだろうか。

**ごらら。** 楊宗譜』の検討をとおして明らかにすることができるのか。これについてはおそらく道光年間に編纂された『東ところで、上述の動向は清代以降に変化があったか否

年)二〇一頁。

本学、二〇一頁。

本学、一九九七年)一〇四頁、同『森と緑の中国史――エ社、一九九七年)一〇四頁、同『森と緑の中国史――エ社、一九九七年)一〇四頁、同『森と緑の中国史――エージョン (1) 上田信「山林および宗族と郷約―華中山間部の事例か(1) 上田信「山林および宗族と郷約―華中山間部の事例か

- 頁および二一頁。 代地相術のバラード――』(第一書房、一九八六年)一四 (2) デ・ホロート著、牧尾良海訳『中国の風水思想――古
- (3) たとえば「風水と山林の保全」について上田信が取り(3) たとえば「風水と山林の保全」について上田信『トラが語る中国部福建のものであるように(上田信『トラが語る中国上げた四つの事例は建甌県、清流県、沙県、政和県と全上げた四つの事例は建甌県、清流県、沙県、政和県と全上げた四つの事例は建甌県、清流県、沙県、政和県と全
- 二巻 中国家族研究(下)、御茶ノ水書房、一九八〇年、著、市古宙三・内藤莞爾・中野卓編『牧野巽著作集』第に随って宗族の結合は弱く」なると述べている(牧野巽に東・福建等にこの傾向が最も強く、それから北へ行く
- 年)三〇七頁。 (『国立民族学博物館研究報告』一七巻二号、一九九二(5) 瀬川昌久「香港新界における宗族の発展と墓地風水」
- 珠村の後竜山は風水林でありながら族有林としての性格6) たとえば森正夫の実地調査によれば、寧化県河竜郷明

林:伝統与現在」『人文研究期刊』二〇一一年九期)。 をも有するものであるという(森正夫「地域社会与森

- (7) たとえば渡辺欣雄『風水の社会人類学――中国とその 周辺比較』(風響社、二〇〇一年)第六章、中国の墓地風
- (8) 中国語圏の研究では代表的なものとして関伝友の一連 代植樹護林的影響」(『皖西学院学報』二〇〇二年一期)、 緑化思想」(『尋根』二〇〇二年四期)、同「風水意識対古 探析」(『農業考古』二〇〇二年三期)、同「古代風水林与 の論考がこれに相当する。たとえば関伝友「古代風水林 水や上田信『風水という名の環境学―気の流れる大地 -』(農山漁村文化協会、二〇〇七年)などが挙げられる。 「論明清時期宗譜家法植樹護林的行為」(『歴史地理論
- 二〇一一年二期)、同『風水景観 叢』二○○二年四期)、同「徽州地区的風水林」(『尋根 (南京、東南大学出版社、二〇一二年)。また日本の研究 ——風水林的文化読解』
- 四四頁がある。なお森前掲「地域社会与森林」は福建省 ~二〇一頁、上田前掲『トラが語る中国史』一四〇~一 に接近するものに上田前掲『森と緑の中国史』一九七 では「エコロジカル・ヒストリー」の視点からこの問題

を事例とし、地域住民が行う山林の保全管理について考

察したものである。

羅氏を例として――」『東方学』一三四輯、二〇一七年、 して」(『東洋学報』九七巻一号、二〇一五年)、同「清代 の墳樹紛争に見る福建宗族の資源獲得戦略 魏郁欣「清代福建の宗族と墳樹:福州郭氏を具体例と 清流安豊

- (10) 『楊族之譜』は楊継震修、民国五十一年(一九六二) はそれをまだ見る機会がない。 「一脈相承炎黄後— 纂された『東楊宗譜』について紹介しており(江明星 費出版、一九九九年)では、道光七年(一八二七)に編 研究会の編集による『楊栄研究文集』(建甌、 二〇〇七年。なお、一九九〇年代に成立した建甌市楊栄 卷)』は楊青編、香港、国際炎黄文化出版社、二〇〇二年 油印本、建甌市図書館所蔵。『八閩三楊匯譜 『中華楊氏通譜(古代卷)』は楊青編、福州、 ―祭村『東楊宗譜』簡介――」)、筆者 同研究会自
- 北、文海出版社、一九七〇年)。 『楊文敏公集』巻二二、楊栄著、正徳十年(一五一 建安楊氏重刊本、台湾国家図書館所蔵(洋装本:台
- 書局、一九九四年)第五篇、林業、第六章、 建甌県地方志編纂委員会編『建甌県志』(北京、中華 万木林自然
- <u>13</u> 民国『建甌県志』巻四、山川、大富山「元季楊達卿出
- 14 郷党亦然」。 之貧者、病者、喪不能挙、 嘉靖『建寧府志』巻一八、人物、 孤而不能成婚嫁者、咸周之。
- 廟·橋梁及貧民養生送死之需、 嘉靖『建寧府志』巻三、山川、大富山 惟 学校
- 路総管を務めたが、その後、 阮徳柔 (?)、字は伯剛、 明朝に降伏した(『閩書』巻 福建寧徳の人。 元末に建寧

- (18) 『楊文敏文集』巻一六、事実、所収。

おそらく建寧路総管のことを指すであろうか。

- 著』がある(『明史』巻一四七、列伝三五)。 文士、文淵閣大学士などを歴任した。著作に『胡文穆雑学士、文淵閣大学士などを歴任した。著作に『胡文穆林院編修に任命されたが、その後、翰林院侍講や翰林院の、建文二年(一四〇〇)の進士。最初は翰(9) 胡広(二三七〇~一四一八)、字は光大、号は晃菴、
- 集』などがある(『明史』巻一四八、列伝三六)。

  「三朝聖論録』、『奏対録』、『歴代名臣奏議』、『東里文九)に翰林院に入り、『明太祖実録』の編纂に従事するこ九)に翰林院に入り、『明太祖実録』の編纂に従事することになった。永楽帝の即位後、内閣に入り、永楽・洪とになった。永楽帝の即位後、内閣に入り、永楽・洪とになった。永楽帝の即位後、内閣に入り、永楽・洪とになった。永楽帝の即位後、内閣に入り、永楽・洪20)嘉靖『建寧府志』巻三、山川、大富山、所収。
- 22) 『東里文集』巻四、所収。
- 進士。永楽年間、文淵閣に入ったが、その後、中書舎人九竜山人、江蘇無錫の人。洪武二十一年(一三八八)の3) 王紱(一三六二~一四一六)、字は孟端、号は友石生、

明代福建の宗族と風水林

七四)。著作に『王舎人詩集』がある(『明史』巻二八六、列伝一著作に『王舎人詩集』がある(『明史』巻二八六、列伝一にまで昇った。詩文や書画に優れたことで有名である。

23)『王舎人詩集』巻二、所収

(25) 金幼孜 (一三六八~一四三一)、名は善、号は退闇、(25) 金幼孜 (一三六八~一四三一)、名は善、号は退闇、た。著作に『前後北征録』、『金文靖集』がある(『明史』た。著作に『前後北征録』、『金文靖集』がある(『明史』た。著作に『前後北征録』、『金文靖集』がある(『明史』を一四七、列伝三五)。

)『金文靖集』巻八、所収。

必遽能均斉也、豈山之神霊有助於我耶。 切。值歳大歉、鄉人乏食。公欲発廩賑之、恐為人所忌、 其贏貯之。復置機春二、賃者随意出直。積数年、廩庾充 備粢盛。旦暮服勤不懈、暨歛穫比它壤倍。登常祀外、以 山延袤数十里、其下沃壤。每歳東作、公率子弟躬耕、以 孫分居、以供祭祀。竜津大富山者、先塋所在。公居其旁。 初非有意種樹、特托此以済貧耳。其種与否、 追感前夢、慨然歎曰、此雖昼夜之所息、 数載、山木茂盛、望之蔚然、陰翳扶踈、井然布列。 既尽、公乃閉関昼寝。忽夢老人素衣策杖、自山而來曰、 於是貧者畢至、 乃託言其山将募人種樹、有能植杉木一株、自償粟一十。 達卿公、天性純孝、楽善好義。 汝所種樹成矣。盍往観之。公異其夢、然亦不以為意。渝 『楊文敏文集』巻一六、事実、万木図事実「昔先大父 至則飯之、給粟而去、亦不録其姓名。粟 凡先世墳墓所在、必令子 因戒子弟曰、 雨露之所濡、 亦未嘗較。 公乃

- 棺槨者、則与之。有不如吾言者、非賢子孫」。售人。惟作橋梁・学舍・寺観・神祠。及貧無室廬、死無今暢茂若此、殆非偶然。汝等当遵吾言、此山之木、誓不
- 孫繁衍、寔克似之。是皆公遺沢所及」。旧木殆尽、而萌蘖之生、又復繁密。発栄滋長、蓋不可数日木殆尽、而萌蘖之生、又復繁密。発栄滋長、蓋不可数(28) 『楊文敏文集』巻一六、事実、万木図事実「数年以來、
- 蓋将以為公子孫蕃衍盛大之徴耳」。 至是復発栄滋長、沛然若前日之暢茂、而不可禦。人咸以 至是復発栄滋長、沛然若前日之暢茂、而不可禦。人咸以 (23) 『金文靖集』巻八「公没後二十余年、山木之萌蘗者、
- (30) 嘉靖『建寧府志』巻三、山川、大富山「人謂、達卿有
- (31) 『明史』巻一四八、列伝三六、楊栄。
- 積徳深厚、所以致此」。(32)『楊文敏文集』巻一六、事実、万木図事実「実我祖宗)
- 33 群季読書其中。自後忝科第、列職詞林、 此嘗有人酬以重価、 伯父彦禎即集兄弟、予以竜津之木三万株、兼資以運輸之 将有所営建、 東二里有山。高壮雄偉、其勢昂然、望之若鶴。 僧大感悦、其後知先大父未葬、遂挙其地以奉、 一善地也、人多求葬而不可得。栄先大父存日、 『楊文敏公集』巻九、記、白鶴山房記「栄家建寧去城 孝行純至、既殁而窀穸未卜。方是時、真如寺僧無涯 於是筮之而吉、 一而乏材。乃邀郷先生蘇公明遠踵門求施。 遂奉柩蔵焉。……栄游郡庠時、 而吾弗之許。 誠有所待者、 叼承眷遇、 願以是為 且曰、 先

- 極矣。是皆先人遺沢所庇、故能獲此」。
- 道吉地、以報三渡之恩。遂指其山曰、此山発自武夷、清如是者三、並無慍色。術曰、無可以酬、汝有父骸未葬、西之傍偶有術士。近詢、舟肯渡否。斉允載過。越日又至。五而卒。兄弟議載父乗舟尋葬。当至歐邑豊楽里停舟、溪五而卒。兄弟議載父乗舟尋葬。当至歐邑豊楽里停舟、溪五而卒。兄弟議載父乗舟尋葬。当至歐邑豊楽里停舟、溪

気如梁。其水流由崇邑、

潮声若雷。形乃雌雄、竜会穴有

正恰安葬吉日。汝今夜急尋眠処、扶柩安葬、自然子孫発白狸端眠、坐乙向辛、案朝筆架。前文峯、後三台。算来

敢望報。言畢、堅辞而去。兄弟欲留不得、曰、子莫非仙号以酬。術曰、汝祖累世積徳、今得福地、豈偶然哉。何号以酬。術曰、汝祖累世積徳、今得福地、豈偶然哉。何と就、当蔭三朝高官、富貴綿遠矣。請術回家致謝、叩其名被衆声霹、狸驚起三伸三跳、悠然而逝。術賀曰、三伸三进、皆之、人。有一人,不是宋真宗祥符辛亥四年十去。忙將父骸葬眠処、回舟。乃是宋真宗祥符辛亥四年十去。忙將父骸葬眠処、回舟。乃是宋真宗祥符辛亥四年十去。忙縣父骸葬眠処、回舟。乃是宋真宗祥符辛亥四年十去。配籍、登祖、遗籍、入,是称赞之,以称登山、诸军和、宣奉、墓籍、入,是称赞之,以称《

- 任宦、および『中華楊氏通譜(古代巻)』一七四、一七五(35)『八闐三楊匯譜(楊栄世家巻)』二、光輝世家、(四)乎。然後反舟回家」。
- (36) 『重刊人子須知資孝地理心学統宗』卷六之上、水法、(36) 『重刊人子須知資孝地理心学統宗』卷六之上、水法、

37

江西徳興出身の徐善継と徐善述という兄弟は有名な人

國雄 した。風水の多くの流派を総合しようとする本書の編纂 須知』という風水書を嘉靖四十五年(一五六六)に刊行 連する墓地風水について具体的な説明を行い、『地理人子 物を輩出した名族の祖墓を実地調査したうえ、それに関 方針は後世の風水書に大きな影響を与えたという(三浦 『風水講義』文藝春秋、二〇〇六年、三六~四〇頁

偕往、 恬静、 後人乎。命舟欲与偕去。万大始異之、既而戚然告曰、吾 来別汝。吾観汝所為甚善、天必有以報之。汝老矣、其在 久而益勤。一日復来謂曰、吾非世人也。今当帰洞天、特 武夷宫、 以自娯。山下有津渡。一夕有道士黄冠玄服。貌甚偉。往 旦吏部尚書、科甲蝉聯、登仕籍者数十人。至今栄盛未艾」。 建安楊文敏公祖地 昼寝夢前道士来迎曰、 居之。因名其地曰楊墩、墓曰白狸。時年已九十有七。嘗 也。白狸起、即葬時也。万大俟期、奉柩至山中、果見白 二親喪、未卜窀穸。豈可去。道士曰、待汝襄大事、与汝 嘉靖『建寧府志』巻二一、雑記「楊万大、崇安人、好 『重刊人子須知資孝地理心学統宗』巻六之上、水法、 汝于某年月日奉父母柩于此。俟有白狸眠処 如所言葬之。不逾年、而他処子孫聞其地饒衍、 『武夷山志』巻五、存疑、楊万大および『武夷山紀 端坐而逝。今太師文敏公栄、万大之後也」。なお、 結茅武夷、 未晚。因与共舟、至甌寧豊楽里、指示溪湾秀峯下 瞑不得済、扣門止宿。自後数往来、万大礼之。 漁樵山水間。夜則懸灯独坐、弦琴咏詩 「葬後三百年始出文敏公栄拝相、曾孫 汝今家事畢、当与俱去。覚即沐浴 、即葬所

> 要』不分巻、 靈異紀、 楊万大にもほぼ同じ内容のものが

- 集』六五~六六頁)。 祖遇仙指示白狸眠処葬祖宗興公墓穴」 伝帖「本族有墳一所、 江明星 「楊墩白狸窠楊栄祖墓考」附件二、太師公在京 坐落甌寧豊楽楊墩、 (前掲 建造牌坊。係 『楊栄研究文
- 41 『中華楊氏通譜(古代巻)』一七四頁。
- 改曰楊墩」。 『楊族之譜』不分巻、五十七代、季瑞公「後丁殷家富
- 43 外的」であるといわれるように、宋元型宗族の特徴は にはこうした『三点セット』を完備した宗族はむしろ例 上徹・遠藤隆俊編『宋―明宗族の研究』汲古書院、二〇 治と宗族形成-「墳墓における祖先祭祀」にあり、とくに一族の歴史にお の設置などを特徴としているが、「実のところ、宋元時代 の宗族組織は族譜の編纂や祠堂における祖先祭祀、 〇五年、所収 して宗族統合をはかることがわかる(中島楽章「元朝統 いて重要な先祖を選択して墳墓における遠祖祭祀をとお 『楊族之譜』不分巻、六十代、錤公。なお、明清時 ―東南山間部の墳墓問題をめぐって」井
- 44 『中華楊氏通譜 (古代巻)』一七五頁
- 45 産業致争者、割己業界之」。 拳者、悉為葬之。孤弱不能自存者、悉収養嫁娶之。有因 『楊文敏公集』付録、 明太師楊栄行実「族人有喪不能
- 46 楹、構所居之堂、扁曰清白」。 『楊文敏公集』 付録、 明太師楊栄行実 「創祠堂二十余

明 代福建の宗族と風水林

- (47) 『楊族之譜』不分巻、明太師楊栄原序。
- (49) 民国『建甌県志』巻二七、孝友、楊譲「又購田二頃(48) 前掲『楊栄研究文集』六五~六六頁。
- (D) 『光芒語·江天春』 [2] 「大司を「天」司、「元書語:(4) 『月』 「外族里嫁娶 喪葬不能為礼者」。
- (51) 『楊族之譜』不分巻、明太師楊栄原序。 盛竟若此也、嗚呼」。 盛竟若此也、嗚呼」。 「宗安楊氏族譜」序五「其嗣挙族入閩、有居建陽者、
- 典型的な風水書として紹介している(上田前掲『風水と関』を、「地域と時代を色濃く反映している」明代福建の(52) 上田信は福建省で出版されたことから、『地理独啓玄

いう名の環境学』二一頁)。

- れる。 主徳」(巻四)、「積徳不積徳之証」(巻四)などが挙げら、たとえば「公位論」(巻三)や「択師説」(巻四)、「審
- (55) 『楊文敏公集』巻一五、書江氏陰徳巻後「人有是徳者(54) 『地理独啓玄関』巻二、童山辯疑「先師云童山不可葬
- 発栄滋長、往往足以兆人之興盛」。(56)『楊文敏公集』巻一四、双桂堂序「草木雖微者、然其雖不求知不責報、而天之所以報之者、自不能違矣」。
- age Organization in Southeastern China, Oxford, 1965 (末かれた「非対称的分節形成」とは、宗族内部において経済れた「非対称的分節形成」とは、宗族内部において経済れた「非対称的分節形成」とは、宗族内部において経済れた「非対称的分節形成」とは、宗族内部において経出された「非対称的分類を表現している。

- 成道男・西澤治彦・小熊誠訳〕『東南中国の宗族組織』
- (58) 宗族組織統合についての研究に上田信「地域と宗(弘文堂、一九九一年)七一頁。
- 過程――」(東京大学『東洋文化研究所紀要』一〇八冊、簿剖析――清代浙東宗族における祠産形成と組織統合の四冊、一九八四年)や田仲一成「粛山県長河鎮来姓祠産四冊、一九八四年)や田仲一成「粛山県長河鎮来姓祠産

一九八九年)などがある。